

原爆文学研究会報

第三〇号

原爆文学研究会 二〇一〇年七月

仁義なき戦い あまりにも有名な映画『仁義なき戦い』（一九七三年）のタイトルバックにはどきもを抜かれた。笠原和夫の脚本によれば「広島上空で炸裂する原爆／巨大な火の玉。地軸を揺がす爆発音。／メインタイトル『仁義なき戦い』／無気味な鳴動と共に、ゆるやかに天空に拡大してゆくキノコ雲——にかぶせてクレジット・タイトルが始まる。N（ナレーション引用者注）「昭和二十年、日本は太平洋戦争に敗れた。戦争という大きな暴力は消え去ったが、秩序を失った国土には新しい暴力が吹き荒れ、戦場から帰った血気盛りの若者たちがそれらの無法に立ち向かうのには、自らの暴力に頼る他はなかった」（『笠原和夫シナリオ集』）。



ヤクザ映画の冒頭でキノコ雲に出くわしたのはまったく意外であった。敗戦にともなう秩序の崩壊という時代状況を描き出すために選ばれた手法なのだろうが、実写のキノコ雲のパンアップに派手な爆発音を合成し、それにタイトルを重ねるといのはいかがなものか。この後、原爆ドームの写真が続くので気づきにくいのだが、そもそもこのキノコ雲、長崎に投下された「ファットマン」のものである。そして、「戦争という暴力」と「新しい暴力」をナレーションでなめらかに接続したまま、本編ではヤクザの抗争を描くばかりで原爆のげの字も出さないのだ。これでは原爆が祭の最初に打ち上げられる客寄せの花火になってしまう。原爆イメージの「乱用」と言えよう。

しかし、キノコ雲をバックに「仁義なき戦い」……映画の文脈を離れば、極めて強いメッセージを訴える映像にも見える。原爆こそ「仁義なき戦い」の果てに造り出されたものだと言えるからだ。結局、原爆イメージの「乱用」とは、何をもって「乱用」なのか。悩ましい問題突きつけてくる映像である。（中野和典）

第三〇回 原爆文学研究会報告

二〇一〇年三月二一日（日）九州大学西新プラザで開催した第三〇回研究会には約二五名が参加。



四條氏の発表については「ライス・クリスチャン問題についてはどのようなように考えているのか」「広島女学院関係者が結果的にアメリカのキリスト者の罪意識の無さを補充してしまっていることについてはどう考えているのか」等の質疑がありました。中根氏の発表については「（偽りの平和攻勢）とは何を意味するのか」「（記憶・想像の多様性）を形づくる被爆体験や引揚体験が表出されるに至る契機・前後関係はどのようなようになっていくのか」等の質疑がありました。

◇ 研究発表¹

占領下における広島女学院の原爆の語り

四條 知恵

キリスト教を教育の柱とする広島・長崎のミッションスクールは、キリスト教の影響を受けた原爆に関する語りを中心的に生み出すという役割を担ってきた。本報告では、広島で被爆した唯一のミッションスクールである広島女学院を取り上げ、学校史・関係者等の出版物から、占領下の広島におけるキリスト教徒をめぐる原爆の語り的一端を考察した。

プロテスタント系の広島女学院は、原爆死者を出した広島市内で唯一のミッションスクールである。原爆により広島女学院高等女学校・同専門学校の校舎は全壊全焼し、生徒・教師合わせて352名もの死者を出すという甚大な被害を受けた。終戦後、占領下の広島女学院では、アメリカの教会との関わりの中で、アメリカ人宣教師の来校や日本人教師の留学による活発な人的交流が見られた。戦後初めてアメリカに渡った広島被爆者と言われる松本卓夫院長、進駐軍以外で広島に渡った外国人宣教師と言われるメリ・マクミランは、いずれも広島女学院の関係者である。空前のキリスト教ブームを迎える中、広島女学院は、積極的にアメリカの教会に資金援助を求め、与えられた支援により戦災からの迅速な復興を遂げる。当時の関係者の手記からは、広島女学院がアメリカとの密接な関わりにより、占領下の広島において一際存在感を放った様子を見ることができ、このことは、広島女学院の原爆の語りが、キ

リスト教界内部に止まらず、外部の広島原爆の語りにも影響を与えた可能性を示唆する。

占領下において、広島女学院の原爆の被害はどう語られたのだろうか。この時期、まだ世に出る被爆体験記の数が限られる中で、松本卓夫院長は積極的に学校と自分自身の被爆体験をアメリカに伝え、援助を求めていった。一部残存する当時の資料を紐解くと、そこでは原爆の惨状を詳細に伝えつつ、学校の一層の復興、さらにキリスト教信仰に基づいた平和の拠点になるという将来図が強調されている。

アメリカの教会に資金援助を求める上での広島女学院の原爆の語りは、アメリカの原爆投下責任を直接追及するものではなかった。アメリカとの親和性という意味では、この時期の広島・長崎双方の原爆の語りにも類似性を見出すことができるが、長崎で見られるようなキリスト教の影響を受けた原爆投下に対する意味づけは、広島女学院において戦後初期の段階から見られることはなく、同じキリスト教信仰に基づきながらも、平和の拠点という異なるロジックが組み立てられることとなった。このことは、後にアメリカの支援者を巻き込んで展開された広島のプロテスタントの平和運動につながる萌芽となつたのではないかと考える。

キリスト教をめぐる原爆の語りは、広島・長崎の原爆の語りの違いを考察する上での鍵となる。引き続き、広島のプロテスタント教会、カトリック教会に調査範囲を広げ、長崎の例と比較しつつ研究を進めたい。

原爆の記憶と朝鮮戦争

——一九五〇年広島における反戦平和詩のダイアグラム

中根 隆行

「原爆五周年」という言葉が散見される一九五〇年夏の『中国新聞』の話題とは、大きくとらえれば、ストックホルム・アピール後の反戦平和運動の機運と朝鮮戦争勃発によるアジア冷戦の本格的な始まりということになるだろうか。とりわけストックホルム・アピール後の反戦平和運動の盛りあがりのなかで勃発した朝鮮戦争は、広島島の詩人たちに強い衝撃を与えた。『われらの詩』第八号平和特集号（一九五〇年八月）の巻頭には、御庄博実の次のような詩が載っている。「あゝ再び／カキー色の／無数の蝶々が／朝鮮海峡を渡つてゆく／植民地から植民地へ／おびただしい蛾粉を降らしながら……」（「蝶蝶」）。この短詩では、被占領下の日本から朝鮮半島へと向かう米軍の飛行機が異様な「蝶々」に擬えられ、朝鮮戦争始発期の被占領下におかれた日本社会の現実が活写されている。

今回の研究発表では、『われらの詩』や『反戦詩歌集』を中心に一九五〇年夏の広島発の反戦平和詩の拡がりを検討した。『われらの詩』第八号には、御庄博実「蝶蝶」とともに「平和のための宣言」と題されるわれらの詩の会の宣言文が併載されている。ここでは「戦争への憎しみ」と「原子爆弾への憎悪」が「うたい出さずにはおられぬわれわれの運動を起さしめた」と記され、「しかし五たび八月六日を迎へようとするヒロシマの上空には、再び爆音が不吉な叫びをあ

げ、今また戦争の脅威が平和な家庭や子供たちの上に乗って襲いかゝろうとしている」とある。この新たな「戦争の脅威」に際して、「芸術的創造」とは「平和の闘い」なしにはあり得ないというのがその骨子である。

けれども、それよりも宣言文で注目したいのは、詩人の責務が「地下に横たはる声なき声」を代弁することに求められ、それが「われわれヒロシマの詩人」という存在証明たりえるのだと主張されている点である。ここには、朝鮮戦争始発期において一九四五年八月六日の原爆の記憶がいかに呼びおこされるのかという問題に加えて、広島における反戦平和詩とは何かという文学的地域的アイデンティティ形成の模索が窺えるからである。

研究発表では原爆の記憶の改体や朝鮮戦争への想像力を喚起する反戦平和詩を検証したが、この時期の『われらの詩』や『反戦詩歌集』には、朝鮮戦争の勃発に際して原爆の記憶が喚起更新され、且原純夫「ヒロシマ」や浅野理枝「悲しい記録」、秦忠雄「奇蹟」に深川宗俊「冴えた眼から」など原爆投下への怒りを表出する詩が多数掲載されるとともに、あさ・かおる「ばくおん」や副島井智男「写真」、田中鉄也「題のないうた」といった在日米軍の出撃出征の姿をとらえた詩も確認でき、多彩な拡がりがみとれた。

周知のとおり、原爆文学とは何か、広島文学とは何かという問いは、サンフランシスコ平和条約調印後の一九五二年一月から『中国新聞』紙上で議論された志條みよ子「原爆文学」について「端を発する第一次原爆文学論争のなかでも話題となるテーマだが、被占領下で逆コースを歩み始めた一九五〇年の時点での広島発の反戦平和詩の展開は、より重要な道標として位置づけられるのではないだろうか。

彙報

第三〇回 原爆文学研究会

- 日時 二〇一〇年三月二一日(日) 一四時より
- 会場 九州大学西新プラザ中会議室
- 研究発表

占領下における広島女学院の原爆の語り
原爆の記憶と朝鮮戦争

——一九五〇年広島における反戦平和詩のダイアグラム

四條 知恵

中根 隆行

日本社会文学会との共催について

二〇一〇年度日本社会文学会秋季大会・第三二回原爆文学研究会

- 大会テーマ 「原爆体験と表象／文学——過去からの呼びかけ、未来への語りなおし——」

○日程 二〇一〇年一〇月二・三日(土・日)

○会場 広島大学東広島キャンパス学士会館二階レセプションホール

一〇月二日 一二時四〇分より

○研究発表

〔*コメント〕

「女性と沈黙——林京子を中心に」 姜 東星〔*野坂 昭雄〕

「小説カルポルタージュか——核時代の表象と大江健三郎——」 山本 昭宏〔*島村 輝〕

「核時代における人間の崩壊と歴史の再生——堀田善衛『審判』試論」 矢崎 彰〔*高野 吾朗〕

「主体のゆらぎ——大田洋子「山上」を中心に」 中野 和典〔*山口 直孝〕

○講演 「肯定形としての〈原爆〉——占領期のいくつかの言説——」

河西 英通

一〇月三日 九時一〇分より

○シンポジウム 「原爆表象／文学と政治的リアリズム」

・基調報告

「誰が「広島」を詠みうるか？」

松澤 俊二

「見なかつた者が描く絵画——非目撃者による原爆の視覚的表象」

加治屋 健司

「知的概観的な時代」の「表現行為」について

——三島由紀夫を視座として「加害」と「被害」を考える——

柳瀬 善治

〔司会 深津 謙一郎・水川 敬章／コメント 岩崎 稔・加納 実紀代〕

機関誌 「原爆文学研究」 第九号原稿募集

「原爆文学研究」第九号を二〇一〇年一二月に発行いたします。

左記の要領で原稿を募集いたしますのでふるってご投稿ください。

○書式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一〇年一〇月中旬、データファイル(Wordか一太郎)を添付しての投稿の場合は同年一〇月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、

一〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八五七一一一九三 佐世保市沖新町一一一

佐世保工業高等専門学校 中野和典研究室

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一九一〇三九五 福岡市西区元岡七四四

九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀾剛研究室内

tel/fax 092-802-5631 e-mail tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>